

「平和を」——《戦争レクイエム》の絶唱 《運命の力》——戦場に駆り立てる悪の惑わし

ウクライナ西部の都市、リヴィウを訪れたのは、1996年の春だった。首都のキーウやオデッサではロシア語がむしろ優勢だったのに、リヴィウはウクライナ語の世界。歌劇場では、ウクライナの民族作品がウクライナ語で上演され、客席係の人にロシア語で解説してもらった。街並みがどこかウィーンを思わせるのは、ハプスブルク帝国の版図だったことがあるから。宗教も正教の典礼儀式と交じったカトリックのユニエイト教会が存在することを知った。

リヴィウは、ポーランドや旧ソ連の一部となり、今はウクライナを代表する街の一つ。ポーランド出身として知られた名指揮者、スクロヴァチェフスキの生地であり、ロシアのヴィオラ奏者、バシメットが音楽

教育を受け、生粋のウクライナの指揮者として欧州で活動するオクサーナ・リーニフの出身州であるともいえば、その変転ぶりは伝わるだろう。

兵士の棺が運ばれる街の日常

そのリヴィウで定点撮影したドキュメンタリー映画「標的までの時間」(ウクライナ、ラトヴィア、チェコの共同制作)を見た。2022年4月のロシアによるウクライナ侵攻後、街で何が起きているのか。毎日、毎日、兵士の棺が運ばれ、歩行者もアナウンスに促され、黙とうする。墓地が新たに造成され、日々、墓が掘られる。「棺を開けてはいけないんだ。中を見て卒倒したやつがいる」(損傷が激しく)中に何も入っていないことも「ある」——。墓掘り人のつぶやきがある。

戦争の実相をつまびらかにする。

公園には、足を失った兵士たちが車いすで集う。話が熱を帯びるうち、バランスを崩してひっくり返る姿が映し出される。痛ましい。見る者は、戦闘の前線で何が起きているかをいやおうなしに想像させられる。

高関健指揮 シティ・フィル公演 兵士を歌う 宮里直樹と大西宇宙

高関健指揮東京シティ・フィルが8月13日に演奏したブリテンの《戦争レクイエム》(すみだトリフォニーホール)は、前線の兵士たちの視点に立ち、戦争を告発する。初演は1962年。第二次世界大戦で破壊された英国の街、コヴェントリーの聖堂の再建を記念して行われた。作品の今日性はいま、一層、増している。第6曲の「リベラメ」(私を解き放ってください)では、キリスト教信仰の「怒りの日」(終末)のテキストと、戦争の現実が一体化し、小太鼓による銃撃音がすさまじく響く中、合唱は、救いを求める悲痛な叫びをあげる。

曲は続いて、兵士の会話に入る。宮里直樹(テノール)と、大西宇宙(バリトン)の歌唱は、劇的であることと、生の失われる厳粛さを歌うバランスが際立った。「考えるにも死ぬにも速すぎて、反応すらしない」。「奴らの戦車の車輪がたくさんの血で固まったとき私は近づいて甘い井戸の水で洗おう」(三ヶ尻正訳)。

「私は君が殺した敵だ、友よ。この闇の中でも君が分かった」という大



戦争へと人をおおるプレツィオジッラを歌う加藤のぞみ(東京二期会オペラ劇場 ©平館平)

和」と大書され、第3幕では、それが「War」(戦争)となる。

ウェールズ・ナショナル・オペラで芸術監督を務めたパウンドニーの演出意図は、明確だった。脇役のロマの女、プレツィオジッラに「物語を牽引する存在」としての役割を与える。プレツィオジッラが第3幕で歌う「ラタプラン」は、陰惨に傾くオペラの中の陽気なエピソードどころか、戦争を煽り、人を戦場に送る悪と惑わしの音楽となる。イタリア戦線に駆り出された兵士たち(合唱団)は、同幕の終わりで全員が倒れ、プレツィオジッラは哄笑する。

パウンドニーは、「さあ、戦争を続けなさい。みんな戦場へ行きなさい。さあ、死んできなさい」という「戦争の象徴」こそがプレツィオジッラであると語る(出演者へのコンセプト説明から)。2026年の世界状況を映しだしている。加藤のぞみの歌唱と演技は、観る者を慄然とさせた。

《運命の力》の物語の縦線は、拳銃の暴発による恋人の父、侯爵の死をめぐる復讐劇。贖罪を願う娘、レオノーラは、修道院長の許しを得て洞窟で祈りの生活に入るが、かつて駆け落ちを願った恋するドン・アルヴァーロの眼前で、侯爵の息子、ドン・カルロによって殺害される。

八嶋恵利奈の指揮で響いたヴェル



《クロイツェル》と第10番のヴァイオリン・ソナタを演奏した
仲道郁代と岡本誠司 ©Noriyuki Soga

ディの音楽は、がんばりがための運命に操られるというより、自由な意思を持った存在として人間を描く。本来は可能なはずの赦しや再生を果たせず、復讐の一念から破局を迎える。レオノーラの祈りは届かない。

では、救いはないのかといえば、祈りの旋律はどこまでも美しく、また、改作された終結の弦は、聴く者にカタルシスをもたらす。起伏に富んだ八嶋の指揮は、こうした物語の運びを丹念に描き、ピットの東京フィルのエスプレッシヴオを引き出した。大村博美(レオノーラ)、樋口達哉(ドン・アルヴァーロ)、今井俊輔(ドン・カルロ)といった歌手たちの表現は力強く、また陰影に富んでいた。オペラは、これほどに憎しみ合い、

殺し合う人間には、死の向こうにしか希望はないと冷然と言い放っているようにも感じられる。だが、人間や社会、世界は変わりうるはずだという思いも浮かぶ。

仲道郁代と岡本誠司 《クロイツェル》の希望

この8月は、稀有なベートーヴェン演奏にも出合った。仲道郁代と岡本誠司によるヴァイオリン・ソナタ第9番《クロイツェル》である。第1楽章の豊かで大らかな序奏は、ベートーヴェンの信じる確かな希望と感じられる。主部は、交響曲第5番のように激しく、闘争的な演奏が展開した。仲道の低音は分厚く、終結部でのクレッシェンドがすさまじい。「対立」から一転、第2楽章は安らぎと対話の世界に移る。鳥のさえずりのように弾むヴァイオリン。レガートの歌は美しく、穏やかな海のようになやむ。

第3楽章は、前進の音楽。《英雄》交響曲の第3楽章や終楽章のように、前に進みつつ、大きな世界が開けていく。仲道の左手が奏でる全曲の結びの低音はこも充実し、善意志と呼ぶべき肯定感にあふれた。ベートーヴェンの音楽はやはり、私たちに励ましと特別なエネルギーを与えてくれる。



高関健指揮東京シティ・フィルの《戦争レクイエム》公演で、死んだ兵士たちを歌う宮里直樹(右手の左側)と大西宇宙 ©K.Miura